

平成 18 年 4 月 28 日 プリーフィング質疑応答

以下は、平成 18 年 1 月 26 日におこなったプリーフィングにおける弊社社長 細谷 英二と記者の皆様との主な質疑応答です。

【質疑応答】

Q . 公的資金の返済については、まずは枠の設定ということだが、額など具体的に考えていることがあれば教えて欲しい。

A . 今年の秋には経営健全化計画の見直しを行いますので、そのプロセスの中で、どういう選択肢、どういう時間軸で返済に必要な財源が確保できるかということについてメッセージを出していきたいということであり、今回はそれに向けての方針を示したものです。どの程度進捗できるかということについては、今後の課題であると思っています。

Q . ホールディングスの川田社長が、子会社の埼玉りそな銀行の社長になるということだが、一般的に見てやや異例な人事であると見受けられるが、主旨について補足説明願いたい。

A . 私が就任したときは、旧経営陣が一掃されて、新しい体制になっていました。その時は必ずしも年次で決まっていたということではなく、残った方の中の組み合わせの中で、りそなグループのトップが配置されていました。私としては、まずりそなグループに今どういうミッションがあるのかということを中心として、その中で、適材の人材を配置するというところで、特に、この秋の健全化計画の見直しに向けて、近畿大阪銀行のあり方というのは、非常に重要なテーマでありますので、そのことについて、水田さん自身と直接議論をやっていったほうが、望ましい方向性が見出せるのではないかとということで、りそなグループの置かれた状況にあわせた配置換えを行ったということで受け止めていただければと思います。

Q . 今回、配当を決めるにあたり、昨年も同様の議論をして見送りとなっているが、その時と今回との違いはどの辺にあるのか。

A . やはり、公的資金の返済が最重要課題ですので、普通株式の配当については、公的資金返済の流れが出る、見通しが立ったということの裏づけがなければ、私としては、関係する皆さんに十分なアカウンタビリティが果たせるとは思っていませんでした。そういう意味で、今回は、普通株式の配当実施と、具体的な公的資金返済の枠組みを作るということ、同時並行的に出来る状況にきたということです。

Q . (配当実施について) 社外取締役からの反対等があったのか。

A . 前回は決定的な反対意見があったわけではなく、時期尚早であるとの意見をお持ちの方が少数おられたという事で、私は、全取締役の納得を受けてから決定したいと思っておりまして、ここまで方針を決めなかったわけではありますが、今日の取締役会では、全取締役の納得の元で、方針を決めさせていただいたということです。

Q . 復配について、公的資金返済マーケティングのメッセージという発言もあったが、詳しく説明して欲しい。

A . 預金保険機構がお持ちの普通株式についての売却についても当然、進めていただかなければならないわけですが、やはり、トータルで公的資金の返済をしていくということがりそなグループに求められた使命であると思っております。あるいは、あらゆるマーケットから、りそなが、健全性が回復してきたと言われるためには、やはり、配当実績を示していくということが重要な課題であると思っております。

Q . 5 月末に決める予定の自己株式取得枠について、その種類、総額等についてのイメージはあるのか。

A . 今のところは決まっていません。当然、りそなグループの意向だけでは決まるものではありませんので、きちんと積み上げてきた剰余金の額を確定させた上で、普通株式の配当財源である 110 億円程度と優先株式への配当財源を除いた剰余金の中で考えていくこととなりますので、最終的な剰余金の数字が見えた段階で、規模など検討していくことを考えております。

Q . 06 年 3 月末での剰余金の総額はどの程度になる見通しなのか。

A . 平成 21 年に強制転換期限の到来する優先株式 7,080 億円を買い入れできる原資くらいの積み上げは出来ると思っておりますが、決算集計中でもあり、まだ想定段階です。

Q . 優先株の買い入れ枠等を今回の総会で決議するにしても、実際の使用については、秋の健全化計画の中で示して、実行していくということか。

A . もちろん、実行の時期は未定ですが、チャンスが巡ってくれば、一つ一つ実行させていただきたいと思っており、全てが健全化計画の発表以降とは思っていません。当然マーケットとの対話の中で、マーケット状況を見ながら、且つ関係当局とご相談しながら、それぞれの施策の実行時期は決めていきたいと思っております。

Q . 近畿大阪銀行については、上場も含めて検討をしていくということか。

A . まだ公式に議論をしておりませんので、水田社長が就任してから、白紙から議論をしていきたいと思っております。上場についてのご提案はいろいろな方面からいただいておりますが、グループ内上場というのが、マーケットからどう写るのかとか、いろいろな要素を検討しなければならないと思っております。当然、お客さまの反応というのが一番大事ですので、この辺をよくわかっている水田社長とお客さまの声を十分受け入れながら、どういう姿がいいのかということをしっかり議論していきたいと思っております。

以上